

難題を抱えている医療の現場ですが、それを打破してくれるのは若い人たちのエネルギーです。若い人たちに、夢を持って仕事・学問をしてもらいたいと、「学問のすすめ」講演会を開催しています。

今回は、新進気鋭の梅野哲哉先生（新潟大学）と、世界に誇る「多治見スタディー」を成し遂げた中心人物である岩瀬愛子先生（たじみ岩瀬眼科）に講師をお願い致しました。

一演題で60分の講演、30分の質疑応答を予定しています。このように時間を掛けた講演会はなかなか行うことができませんが、お仕事の理解を深めるためには、一つの試みだと思えます。

医師・研修医・看護師・視能訓練士・薬剤師・学生等、多くの皆様のご参加を期待しています。

記

済生会新潟第二病院眼科「学問のすすめ」第5回講演会

日時：2011年10月29日（土）16時30分～19時30分

会場：済生会新潟第二病院 10階会議室

講師 梅野 哲哉（新潟大学）

岩瀬 愛子（たじみ岩瀬眼科）

参加無料

要；事前登録

- 1) 「私と緑内障」
岩瀬 愛子（たじみ岩瀬眼科）
- 2) 「神経再生の最前線—神経成長円錐の機能解明に向けて—」
梅野 哲哉（新潟大学）

【事前登録】

会場の準備の都合で、事前登録と致します。

締め切り：2011年10月25日（火）

申し込み先 済生会新潟第二病院眼科

「学問のすすめ」事務局 安藤伸朗

郵送 950-1104 新潟市西区寺地280-7

Fax 025-233-6220

e-mail gankando@sweet.ocn.ne.jp

「学問のすすめ」（第5回）講演会

参加申し込みます

氏名～

所属～

職業～

住所～

連絡用メールアドレス～

*ご意見等ありましたらお願いします～

電話での申し込み、お問い合わせはお断り致します

* 「学問のすすめ」の意味するところ

第4回講演会で講演して頂いた三宅養三先生（名古屋大学名誉教授；眼科）から以下のような解釈を教えてくださいました。

福沢諭吉の「学問のすすめ」には「天八人ノ上二人才造ラズ人ノ下二人才造ラズ」という有名な言葉がある。これは「人間は生まれたときは皆同じ、歳を経て人間の差ができるのは学問をするか否かである」ということを言いたかったのである。

来年の3月に講演をお願いしている大森安恵先生（東京女子医大名誉教授；内科）から、次のように教えて頂きました。

「学問のすすめ」といえば誰も福沢諭吉を思い浮かべるが、諭吉より62年先に生まれた江戸時代の儒学者、佐藤一斎は『学は一生の大事』というタイトルで、「小にして学べば 則ち壯にして為すことあり、壯にして学べば 則ち老いて衰えず、老いて学べば 則ち死して朽ちず」と述べ、学問の大切さを力説している。

済生会新潟第二病院眼科「学問のすすめ」第5回講演会 講演抄録&略歴

1. 「私と緑内障」

岩瀬 愛子 （たじみ岩瀬眼科）

【抄録】

岐阜大眼科に入局した時、自分のテーマは「緑内障」と決めていた。当時の岐阜大は、早野三郎教授の下、黎明期の眼内レンズ関連の研究が主流であったのに「私は緑内障をやりたいのです」と研修医の分際で早野教授に直訴したことがある。願いかなって研修医としての私の最初の学会発表は、「閉塞隅角緑内障眼の生体計測」であり、早野教室としての最後の学会発表は、妊娠9カ月半で発表した

「Mucopolysaccharidosisによる緑内障の病理」であった。後者はオーベン船橋正員のご指導で論文となった。

直後に産休・育休に入り、勤務に復帰した時には、早野先生は学長になっておられ、後任の教授はなんと「緑内障」の北澤克明先生であった。テーマとして頂いたのは「ハンフリー視野計の日本第1号機」での仕事で、世界の収集サイトの一つとして「STATPACの日本人正常眼データベース」、「SITAプログラムの正常眼および緑内障眼データベース」や「各種視野解析ソフトの開発」を行った。これらの関連研究で国際視野学会（IPS）にも参加させていただけるようになり、多くの国内外の視野研究者及び緑内障研究者と接することができるようになった。

1990年、多治見市民病院眼科に赴任した。大学でもない研究機関でもない「自治体病院」での「研究」は周囲の理解がなかなか得られにくい状況であったが、こだわりの「緑内障」を自分のライフワークとするべく、環境を整えるため市や市長に働きかけていた。赴任から10年たった2000-2001年日本緑内障学会の疫学調査を多治見市で行うこととなり（多治見スタディ）、同時に、多数の一般市民への眼科検診も実施したこの事業は、それまでの私の経歴と環境とをフルに生かして緑内障研究に貢献できる大きなチャンスとなった。

北澤先生の命令ではあったが、小さいながらもいつも「緑内障」にアンテナを張って、いつでも戦いの準備ができていた私に、神様がくれた仕事であったように思っている。今は、一開業医としての日常診療の中で、大学などの研究機関では見つからない何かを、いつか発見できるのではないかと、わくわくしながら、またまた小さなアンテナを持って診療している日々である。

【略歴】

- 1980年 岐阜大学医学部医学科卒業
- 1981年 岐阜大学医学部眼科助手
- 1989年 岐阜大学学位取得(医学博士)・眼科専門医
- 1990年 多治見市民病院眼科医長・岐阜大学非常勤講師
- 1995年 多治見市民病院眼科診療部長
- 1996年 International Perimetric Society(IPS：国際視野学会) Board Member
- 2002年 日本緑内障学会評議員・IPS:Vice President (2002-2006)
- 2005年 多治見市民病院副院長・日本眼科学会評議員
- 2008年 金沢大学非常勤講師(眼科)
- 2009年 たじみ岩瀬眼科院長・東海大学客員教授(眼科) 現在に至る

【賞罰】

- 2003年 日本緑内障学会特別賞（多治見スタディへの貢献に対して）
- 2004年 AIGS Award（on behalf of Japanese Glaucoma Society）
- 2006年 社団法人日本眼科医会表彰 会長賞
- 2007年 第2回World Glaucoma Congress Poster入賞

2. 「神経再生の最前線—神経成長円錐の機能解明に向けて—」

梶野 哲哉 (新潟大学)

【抄録】

現在の緑内障基礎研究の主眼は発症に関わるメカニズムの解明とそれらを基盤とした進行予防法の模索にある。また、網膜神経節細胞死のメカニズムも明らかにされつつあり、神経保護に関して少なくともin vivoでは効果が確認されている物質も少なからず存在し、臨床への応用が今後の課題である。これらの課題が克服された時、我々の最終目標となるのが失われた視神経の再生だと考えられる。

昨今、いくつかの分野においては臨床応用の段階にまで到達したものもある。しかし、緑内障を含む神経疾患においては仮に幾多のハードルを越えて神経細胞が再生されたとしても、機能の再生を果たすためには運命付けられたターゲットに軸索を投射する必要がある点で他の組織再生に比べはるかに困難である。その一方で、生命科学の分野においてはヒトゲノム計画の終了をはじめ、質量分析器の進歩、RNAiなどツール面での革新があり、研究そのものを加速させている。

発表者らは伸長している神経突起の先端に存在する成長円錐と呼ばれる構造体に着眼し、細胞・タンパク質レベルでの研究を行った。成長円錐のプロテオームを網羅的に解析し、その結果を基に免疫細胞染色を用い、これまで成長円錐への局在が知られていなかった複数のタンパク質についても存在が明らかとなった。ここではそれら研究成果と、眼科分野における分子生物学的基礎研究の今後について触れる予定である。

【略歴】

1999年 新潟大学医学部卒業
同年 新潟大学医学部眼科入局
2000年 長野厚生連小諸厚生総合病院
2005年 新潟大学大学院卒業
2006年 新潟県立新発田病院医長
2008年 新潟大学医歯学総合病院勤務
現在に至る

第6回「学問のすすめ」講演会を、以下のように予定しています。
今のうちにカレンダーにチェックをお願いします。

済生会新潟第二病院眼科 「学問のすすめ」 (第6回) 講演会
日時：2012年3月17日(土) 午後
会場：済生会新潟第二病院
演題：「私の歩いた一筋の道～糖尿病と妊娠の分野を開拓しながら学んだ事」
講師：大森安恵 (海老名総合病院・糖尿病センター長)
(東京女子医科大学名誉教授)

演題：「糖尿病網膜症と全身状態
～どの位のHbA1cが何年位続けば網膜症は発症するのか？」
講師：廣瀬 晶 (東京女子医大糖尿病センター眼科)